

授業力向上の取組に関する教員の意識調査から

調査及び調査結果の概要

栃木県総合教育センターでは、授業力の向上のための方策を探ることを目的として、平成18年5月から6月にかけて、授業力向上の取組に関する教員の意識及び実態について、アンケート調査を実施しました。

調査にあたっては、平成18年度の、教職5年目研修受講者、教職10年目研修受講者、教職20年目研修受講者を対象に実施し、974人から回答を得ました。ここでは、小・中学校のみのデータを用いて分析しています。

調査結果から、次のような事柄が明らかになりました。

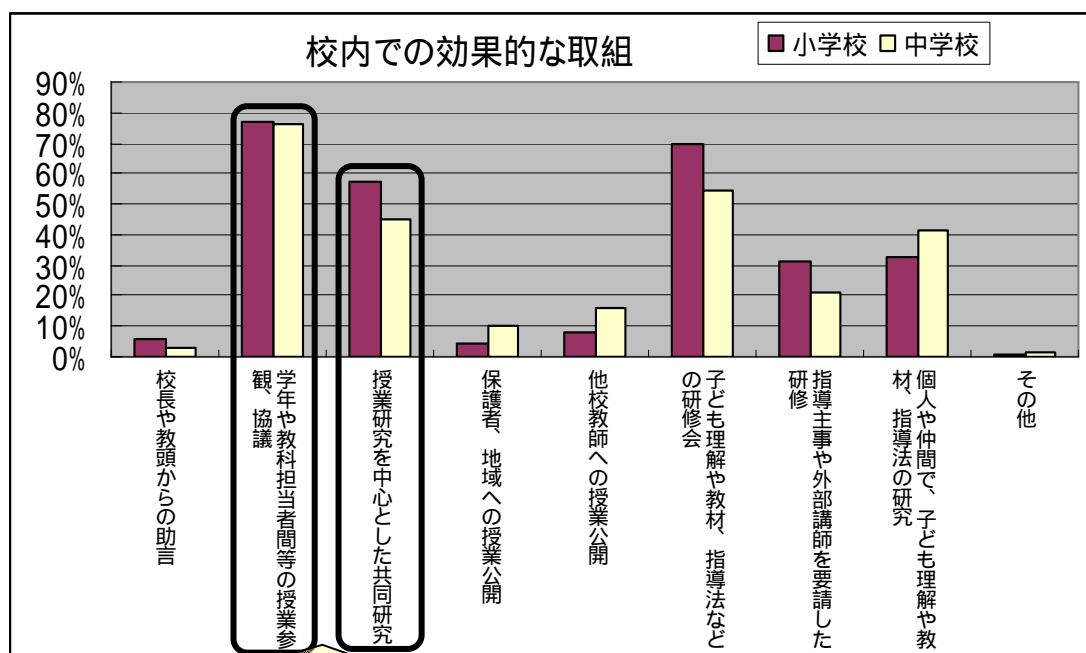
調査結果から明らかになったこと 1

授業力の向上を図るための、校内での効果的な取組は、研究授業と授業研究会。

若手の教員ほど研究授業と授業研究会が有効だと感じている。

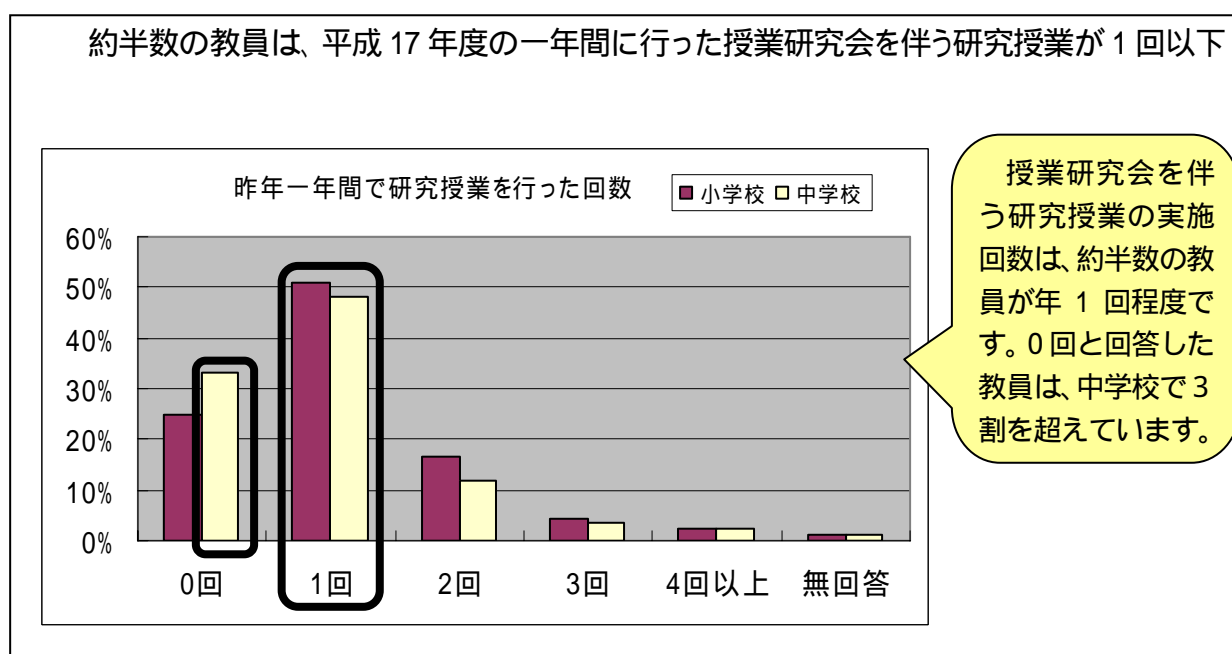
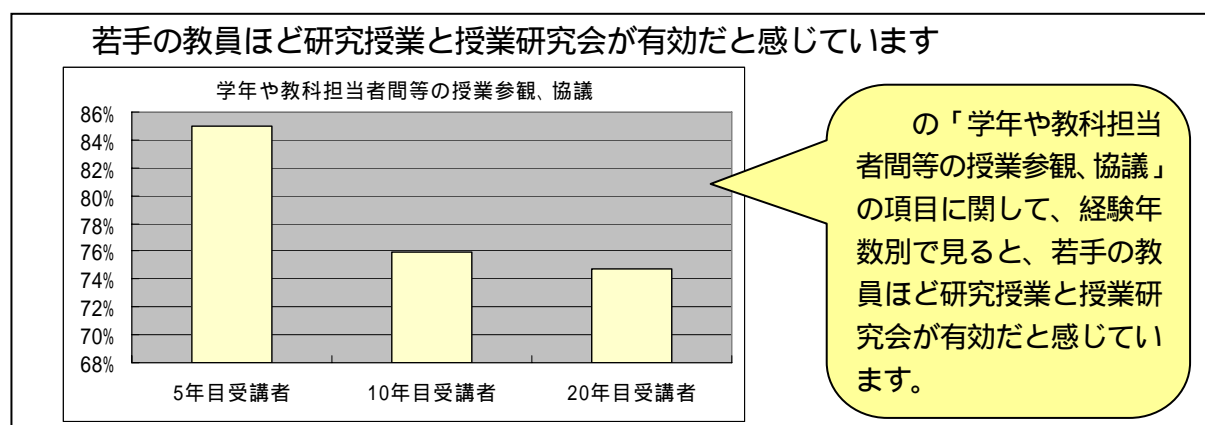
約半数の教員は、平成17年度の一年間に行った授業研究会を伴う研究授業が1回以下。

授業力の向上を図るための、校内での効果的な取組は、研究授業と授業研究会



授業力向上のための効果的な校内の取組は、「学年や教科担当者間等のチームで授業を参観し合い、協議をする」、「授業研究会を中心とした共同研究をする」等の回答が多くありました。このことから、他者に授業を見てもらい、アドバイスや感想を得ながら、提供した授業をもとに一緒に考えていくことが授業力の向上に最も効果的であると考えている教員が多いことが明らかになりました。授業力の向上を図る効果的な方法として、教師は、授業研究が最も効果的であると考えています。

次に、最も回答の多かった「学年や教科担当者間等の授業参観、協議」の項目のデータを経験年数別に見てみました。



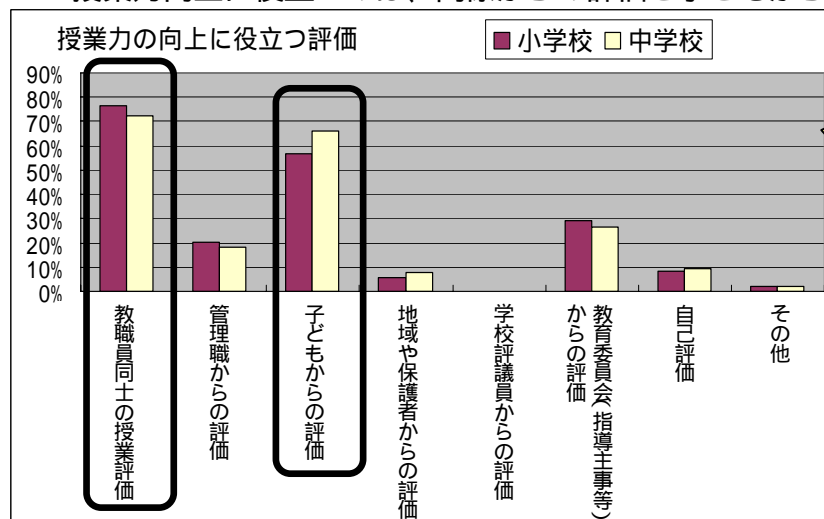
以上のことから、「教員同士が互いに授業を参観し合い、授業について協議を深める授業研究会」が授業力向上を図るための効果的な校内の取組であると、多くの教師が考えていることが明らかになりました。しかし、実際に 17 年度の一年間の実態を見ると、授業研究会が必ずしも活発に行われているとはいえない状況にあります。

評価者のうち、自身の授業力の向上に役立つと思われるのは、誰からの評価が尋ねてみました。

調査結果から明らかになったこと 2

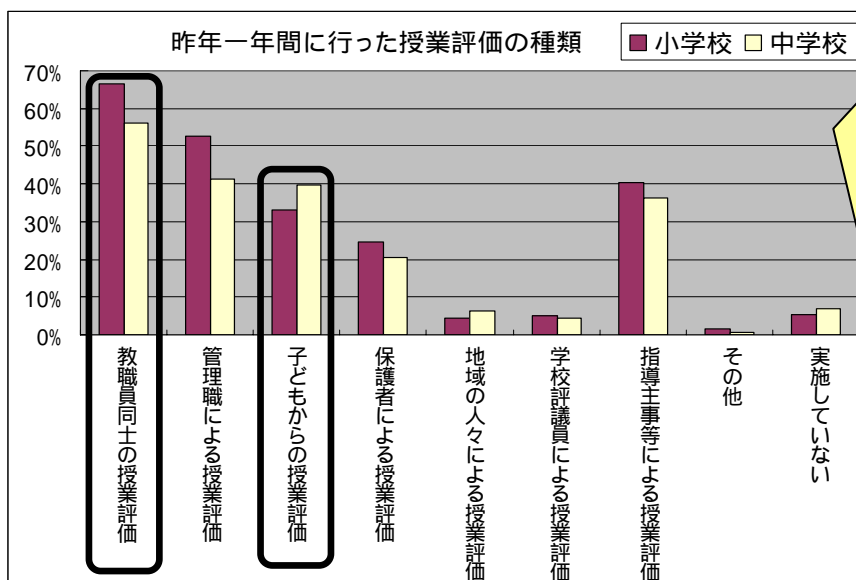
授業力向上に役立つのは、同僚からの評価と子どもからの評価。
教職員同士の評価に比べ、子どもによる評価の実施率は低い。

授業力向上に役立つのは、同僚からの評価と子どもからの評価



多くの教員が、授業力向上に役立つのは、「同僚からの評価」と「子どもからの評価」だと考えています。

教職員同士の評価に比べ、子どもによる授業評価の実施率は低い



実際に行われている授業評価のうち、教職員同士による評価が最も高く、次いで管理職による評価、指導主事等による評価と続いています。
一方で、授業力向上に役立つと思われる「子どもからの評価」は「教職員同士による評価」と比べ、小学校では半数ほどの実施状況です。

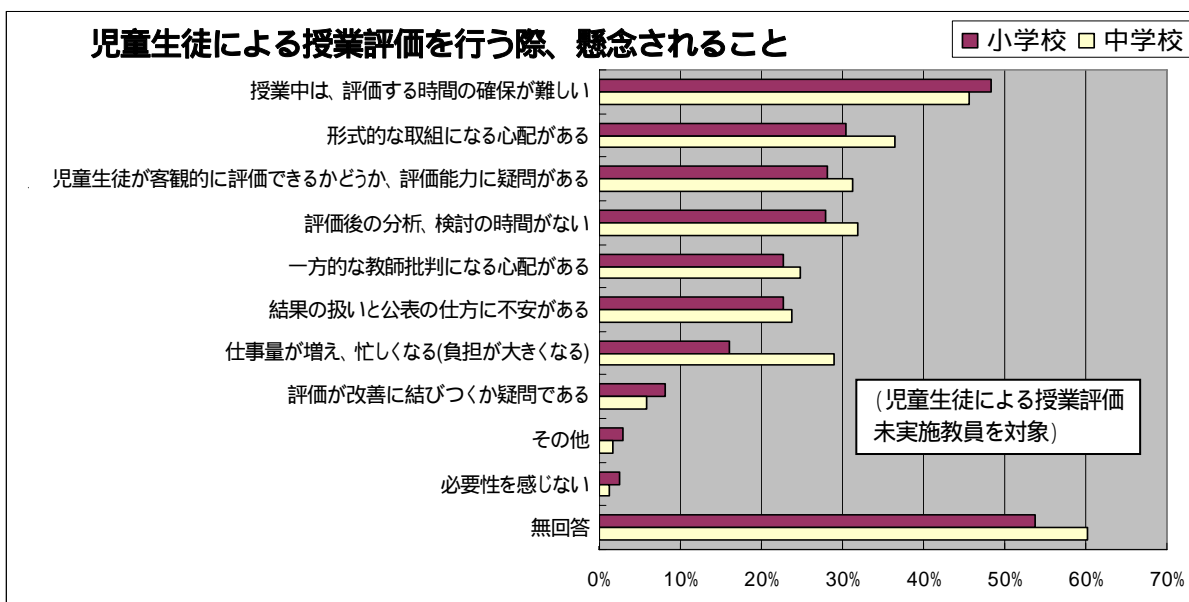
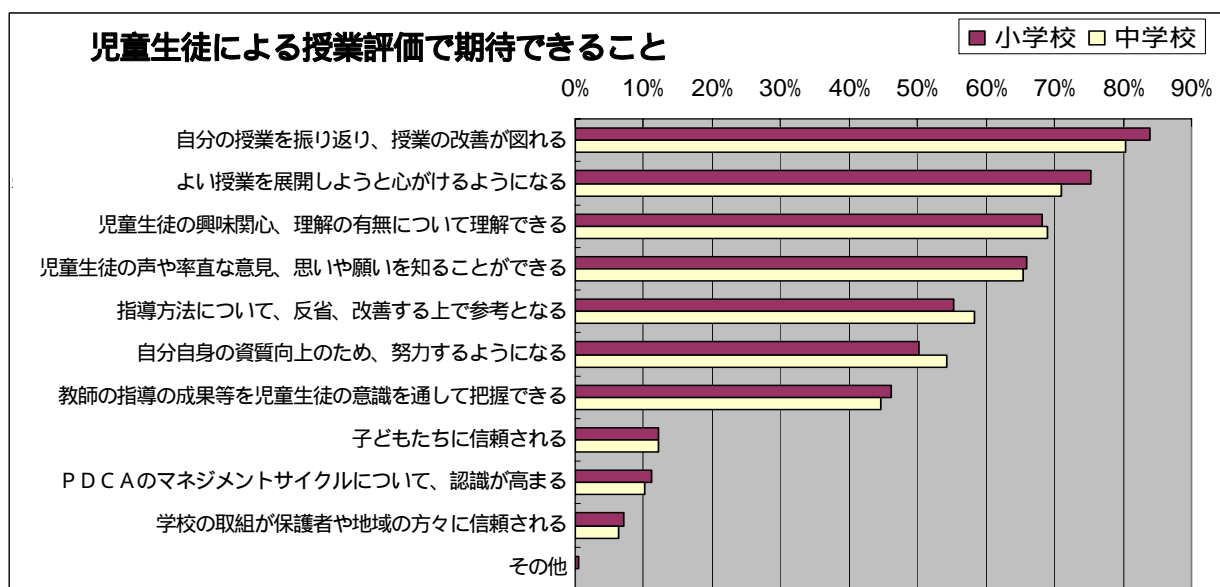
以上のことから、同僚と子どもからの評価が授業力向上に役立つと考えている教師の割合が高い一方、教職員同士の評価に比べ、子どもによる評価の実施率が大幅に低いことが明らかになりました。

児童生徒による授業評価の期待できる効果と、実施するにあたって懸念されることについて尋ねてみました。

調査結果から明らかになったこと 3

児童生徒による授業評価で、期待できる効果は、「授業の振り返りを通して、授業の改善が図れる」「よい授業の展開を心がけるようになる」等。

児童生徒による授業評価を行う際に懸念されることは、「評価する時間、評価後の分析、検討の時間の確保」「形式的な取組への懸念」「児童生徒の評価能力の問題」等。



以上のことから、児童生徒による授業評価には、授業の改善をはじめ様々な効果を大いに期待している一方で、未実施の教師にとっては、実施上の懸念も少なくないことが明らかになりました。